「今日の説教、聴き手のために」　2013/9/15　明治学院教会（320）
（このプリントは毎週作っているものです）　牧師　岩井健作

『ダゴンが倒れる』　サムエル記上５章1-5 節

１、サムエル記上５章から７章の一節までは、読むほどに奇妙な物語である。ペリシテ人はイスラエルが戦場に持ち出した「神の契約の箱」を戦利品とし、ダゴンの宮殿に運んだ。次の朝早く、ダゴンの神の像が倒れている。アシュドドの街、エクロンで疫病が起きる。「町全体が死の恐怖に包まれ」(5:11)たという。ペリシテは相談し、賠償を付けて、イスラエルの町ベト・シュメシュに送り返す。後々エルサレムに巡礼に来た人々に、物語は語り継がれる。主は「異邦の土地」でも主であり給うと。
２、時代がたって、申命記の歴史家たち（サムエル記の編集者たち）が、この物語の意味の再解釈を行った。主は異邦の地「バビロニア」でも働きたまうという信仰、予言者エレミヤの信仰と重ねて受け継がれた。神殿の神ではなく、異邦の囚われの地でも民と共なる神。自明の神ではなく、新しく出会う神体験が、歴史の物語に重ね合わされた。エレミヤは、ユダの国の敗北と捕囚を、神の裁きと新しい契約（救い）として捉えた(31:33)。こうして「神の箱」は敵側にあっても力を発揮すると物語として読み直しがなされた。
３、物量の神の象徴がダゴン。ダゴンが倒れるというテーマ。ダゴンは「穀物」あるいは「収穫」という意味。カナンの農耕神のバアルの神の父。ペリシテ人たちは、もともとは海洋民族で商業主義、カナンに侵入して、カナンの宗教に同化された。ダゴンの神は、富の所有を是とする神。人間の自己利益を拡大再生産する神。このような宗教は、社会全体が病む時、お互いに助け合うという生き方を支える力にはならない。困難が来た時、恐怖に陥る。ダゴンを祭る社会の狼狽は後々の語り種となった。それに対して「神の契約の箱」の意味が再認識される。モーセがシナイ山で神から与えられた律法を刻んだ「石の板」が入れてある箱。（申命記１０章１節以下）「主は私に言われた『石を切って板を二枚作りなさい・・・私は言葉をその板に書き記す・・・あなたはそれを箱に納めるがよい』」。契約の内容は、出エジプト記の２０章、いわゆる「十戒」。（讃美歌２１の９３－３、参照）。「ほかに神があってはならない」。現代の言葉で言えば、己を神としない事。それは同時にお金を至上価値（神）としない事。自己完結性を砕かれると言う事。もっと日常倫理的な面で翻訳すれば、十戒、後半、隣人と共に生きる事。神を自己相対化の視座に据える事。自分本位を見直す事。
４、敵軍の中にある神。それは受難の姿。受難において神の姿を見る、とは新約聖書のイエスの十字架の姿を連想させる。私たちの歴史には、「ダゴンが倒れる」奇妙な物語はいっぱいある。しかし、そこにこそ神の働きを覚える。それを大事にしたい。
１９９５年阪神大地震での神戸の街での体験が忘れられない。兵庫教区は「緊急生活貸付資金」の被災者支援活動を行った（小田実ら市民議員立法の「被災者生活再建支援法」が結実した系譜にある市民活動）。「ダゴンの街（といわれるほどの）・株式会社神戸市」で、被支援者の一人の街のおばさんから、人間の息吹を感じた。